

＜寄稿：流域紀行＞

チベット・ヤルツァンポとアッサム・ブラマプトラ川 —インド東北部・アルナチャル・プラデシュ州の国境を歩く—

辻 和毅*

1. はじめに

中国チベット自治区の西南端にカイラースという高峰が聳えている。標高 6656m の未踏峰である。お椀を伏せたような特異な山容は独立峰として超然と鎮座しチベット仏教の聖山と崇められるに相応しい。ヤルツァンポはその山懷に源を発し、チベット高原を東に流れてインド・アッサム平原に至る。途中インド領内に入って、ディハン川、ブラマプトラ川と名前を変えて西流し、バングラデシュでガンジス河と合流して、大デルタを悠然と流れベンガル湾に注ぐ大河である。流域面積は 173 万 km² におよぶ。流路が東から西に大きく転向する東チベットでは、7000m を越える東ヒマラヤ山脈を分断して大峡谷を刻み込んでいる。現在東ヒマラヤ山脈はインド・東北部とチベットの間に障壁となって国境を成しているが、そこに至る歴史は 20 世紀初め山稜に沿って引かれた「マクマホンライン」までさかのぼる。

2015 年 10 月インド・アッサム州のテズプールからアルナチャル州のタワンまで行く機会があった。今回紹介するのはこの大河のほんの一部に過ぎず、流域紀行と言うには少し範囲が狭くおこがましい。この小文は同じ大河の中流域と下流域が、20 世紀になって国境で隔てられ、国際河川となったために引き起こされた激動の近代史を点描したひとコマである。それははからずも 1959 年チベット動乱を逃れた傷心のダライ・ラマ 14 世がチベットからインドへ亡命した苦難のルートを逆にたどる旅でもあった。走行距離は片道 420km、標高差は 50m から 4000m であった。

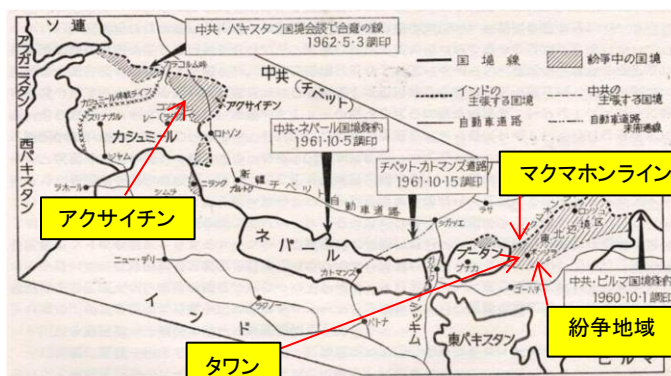


図1 インドと中国の国境紛争地図（長沢, 1964 に加筆）

2. チベットとインドの国境

インドと中国のチベット自治区の境界は、東はミャンマー北部からインドのアッサム、ブータン、シッキム、ネパールを経て、西はパキスタンとインド北部に跨るカシミール地方（ラダクとアクサイチンを含む）に至るまで、長さ約 3500 km におよぶ（図 1）。この中で、正式に画定した国境線は、ネパールとの間が 1961 年に、パキスタンとは 1962 年にそれぞれ条約が締結されて決着し、シッキム州は 2005 年に解決した。ブータンとの国境線はまだ画定していない部分が多く、現在も交渉中である。ことに、ブータン北縁を東西に伸びる国境線のほぼ中央にあるクーラカンリ（7554m）を中心とする大きな山塊は、細い尾根筋でブータンヒマラヤの主稜とつながっている。この地域では一方的に中国がブータン主張線を越境して開発を進めている。ブータンは抗議しているが、中国は居座ったままである。最近両国間で政治決着したような話も聞いたがたがははっきりしない（岩田修二氏談、2008）。ミャンマーと中国の国境は 1960 年に条約が締結された。

* （株）技術開発コンサルタント 〒812-0036 福岡市博多区上呉服町 12-8 （元）熊本大学大学院客員教授

表1 マクマホンラインを超えた人たちと主な事変

探 検 者	年 代	地区・方向	主 な 事 変 ・ 年 代	
ナイン・シン(パンディット)	1875	↑ ↓	1840~42	アヘン戦争
キントアップ(パンディット)	1883~84	↓ ↑	1863	パンディット派遣承認
リンジン・ナムギャル(パンディット)	1885~86	↑ ↓	1873	インナーライン設定
オルレアン公、ルウ(仏)	1896	↓	1887	仏領インドシナ連邦
ペイリー(英)	1911	↓	1903~1904	英国チベット遠征
プリチャード(英)	1911	↑	1904~1905	日露戦争
ダンバー、ダンドラス(英)	1913	↑	1911	辛亥革命
トレンチャード、ペンバートン(英)	1913	↓	1911~1913	アボール遠征
ペイリー、モースヘッド(英)	1913	↓	1913~14	シムラ会議
多田等観(日)(?)	1913	↑ ↓	1914~18	第1次世界大戦
キングトン・ウォード(英)	1933, 35, 50	↑ ↓	1933	ダライラマ13世死去
コールバック(英)	1933	↑ ↓	1939~45	第2次世界大戦
ラッドロウ、シェリフ(英)	1934, 36	↑ ↓	1947	インド独立
コールバック、ハンベリー・トレイシー(英)	1935~36	↑ ↓	1948	ビルマ連邦独立
モース(米)	1949	↑	1949	中国成立
ジーン・キングトン・ウォード(英)	1950	↑ ↓	1960	ビルマ・中国国境条約
パターソン(英)	1950	↑ ↓	1961・1962	ネパール、パキスタン国境条約
ダライラマ14世(チベット)	1959	↓	1962	印中国境紛争

このように、中国とインドなどとの国境は今日でも未画定で暫定的な区間の方が長い。この不安定な現状は、暫定線を挟んで偶発的な小競り合いがたまに報道されるが、いつもは遠い時代の遺産として忘れ去られている。そのなかで、チベット東南部とインド東北部が接する区間は、延長が約 1000km におよび最も長い。この国境線が「マクマホンライン」と呼ばれる部分で、今回の主題である（図 1）。中国はほぼ南のアウターラインに沿った境界を主張しており、アルナチャル・プラデシュ州は中国領になる。

3. マクマホンライン

このラインの範囲と線形について明らかにしておく、東はミャンマー北部国境からチベット東南端の崗日嘎布山群の南に沿って西北に向かい、ヤルツァンポの深い峡谷を跨いで、東ヒマラヤ山脈の主稜に移り、西南に下ってブータン東北端まで続いている。現在の行政界ではインド東北のアルナチャル・プラデシュ州（陽いずる国）と中国チベット自治区の実質的な支配範囲を分断する国境線となっている。一昨年 2014 年は「マクマホンライン」が歴史に登場してちょうど 100 周年にあたった。ここで成立の時代背景をまとめておくのも意義あることかもしれない。

今日ではあまり語られることのないこのラインは、1913 年秋から翌年夏にかけて開かれた「シムラ会議」という国際交渉の場で決められた。このラインをめぐる政治情勢について、会議前後の 20 世紀初頭にチベット東南部からインド東北部で活発に行なわれた探検を考え合わせながら簡単に述べてみたい。それは、探検家たちの行動がラインの成立に深くかかわっていると思うからである。

4. マクマホンラインを越えた人たちと主な事変

マクマホンラインが成立する 1914 年を挟んで、前後 80 年ほどの間にこの境界を北から南に、あるいは逆方向に通過したと思われる人たちを拾いあげた(表1)。大半は探検家だが、ほかにパンディット(ヒンズー語で学者の意)やキリスト教伝道師が含まれる。かのダライ・ラマ 14 世もラインを南に越えインドに亡命した。これらの人たちの足取りから、マクマホンライン成立の時代背景を垣間見ることができる。表の中で地区・方向の欄の色と矢印の見方は、紫はライン外の地区、黄色はライン西部、黄緑はライン中部、空色はライン東部を示し、矢印は下向きがラインを北から南に越えたこと、上向き矢印はその逆を示している。例えば最上欄のナイン・シンは他の地区からチベットに入り、ライン西部のタワンから南のインドに抜けたことを示している。右側に関係する主な歴史的な事変を並べた。

5. パンディット

インド測量局によるパンディット派遣案は 1863 年に英国政府に公認され、採用は 1862 年から 1863 年にかけてモンゴメリーによって行なわれた。その案とは、当時チベットが厳しく鎖国していたため、「現地人を教育、訓練し、パンディットとして潜伏させて秘密裏にチベットを測量させる」ことであった。

最初にマニ・シン(Mani Singh)と彼の従兄弟であるナイン・シン(Nain Singh)の二名が採用された。シン・ファミリーと言われるように、機密保持のため親族から選ばれる例が多かった。Ward(1998)によれば 21 名のパンディットの名前が挙がっており、1885 年頃まで活動した。約 20 年間もスパイ隠密活動が続いたというのも驚きではある。そのなかでマクマホンライン近傍の地域を踏査したのは、ナイン・シン、キントゥップおよびリンジン・ナムギャルの三名である。ナイン・シンは第一号のパンディットとして一年間の訓練を終え、1865 年 1 月モンゴメリーの命により、マニ・シンと二名で任務についた。彼が受けた使命は、西チベットのマナサロワール湖からヤルツァンポを東に下り、ラサに至って緯度など地理情報を得ることであった。こうしてパンディットの活動は始まった。

ナイン・シンは三回目の踏査でラサに再度立ち寄り、英国の使節団の到着を待つ資金を受けることも考えたが、官憲の追尾を恐れ自身はいったん急いでラサから北に出立し、夜になって南に方向転換して逃げ、ツェタン近くでヤルツァンポを渡った。このように人目を欺く逃避行も訓練されていた。資金も不足していたのでインドへの最短距離のルートを選んだ。その後ツェタンで南からヤルツァンポに合流するヤルルンチュを遡上し、聖山ヤラ・シャンポ(6635m)の東南にあるカルカン・ラを越え、スパンシリ川の源流に出た。緩やかに起伏するチャユール高原の分水界を越え、東南チベットの交易の中心地ツォナゾンに到着した(図2)。南にあるタワン(2980m)の避暑地である。もうここはブータンに流れ下るマナス川の源流である。1874 年 12 月にその下流のタワンに近い村に着いたが、二ヶ月留め置かれた。彼の目的とした巡礼先のシンクリ寺院(Sangjiling Gompa?)は英国領にあり、それ以上進むには許可が必要であった。許可を取るには時間がかかるため、タワンに荷物を置き戻ってくる条件で許された。その後のルートは次の通りである。タワンからセラ(4270m)を越え、ディランゾンを通ったあと、南に向かってマンダラ、フタンラを越え、タクルンゾン(タルンゾン?)、アムラタラ(アマツウラ?)を経由してアッサムのウダルグリに抜け、苦難のルートマップ測量を終えた。以上のことから当時インド政府とチベットの境界はタワンの南にあったことがわかる。現在の国境はタワンの北約 20km のマクマホンラインにある。最終的には英国領ダラン(Dirang Dzong?)地区の役人の助けを借りて、アッサムに入国することができた。1875 年 3 月のことであった。ブラマプトラ川畔の町グワハティを経由して蒸気船で、3 月 11 日カルカッタに到着した。彼が探検したニヤムジャンチュや東隣のツェタンを含むタワンチュの上流域は、約 40 年後の 1913 年にベイリーとモースヘッドによって広範に探検され詳細な地図が作成された。

次のキントアップの長期（1880～84）にわたる踏査は波乱に富んで非常に興味深いものである。彼は 1883 年ごろツァンポ峡谷を南に下り、アッサムに到達する寸前まで行った。しかし現地ミリパダムのアボール族に阻止され引き返さざるをえなかった。この時「ヤルツァンポはプラマプトラ川につながる」という世紀の発見は彼の手からこぼれ落ち、30 年後ベイリーたちが手にするのである。彼の帰還後インド測量局が行った聞き取りで注目したいのは、キントアップがどこまで到達したかを論じた時、英国人がその地点の距離を示す場合、「英国領（British boundary や British frontier）から北に 35 マイル」（56km、なんとわずか、あと数日の距離！）と報告していることである。これは、当時（1914 年のシムラ会議以前）英国人がチベットとの国境はアッサム平原と北の山岳地付近の地形境界（標高 100～200m）に引かれていたアウターラインと認識していたことを明らかに物語っている（図 2）。

以来、中国との国境紛争において、アウターラインは英国の喉もとに刺さったトゲ（Lamb、1966）のように、中国を利する論点の一つとして英国やインドの後の世代を苦しめる結果をもたらした。アウターラインは、いわば英国は敵に塩を送ったことに、中国には渡りに舟であったのである。

さらに続くリンジン・ナムギャルの東ブータンの踏査（1885～86）は、クーラカンリ（7554m）から東に続くブータンヒマラヤ山脈を初めて明らかにした探検として評価を得た。当初は西ブータンから入域する予定であったが、知人が居ることを恐れて、そちらは信頼する部下のフルバにまかせ、のちほど落ち合うことにした。彼自身はブータンの南縁を東進し、途中でゾンポン（知事）から拳銃を持っているかと尋ねられ、見返りに旅行許可書をもらうことで難事を緩ぐというきわどい事件にあった。東ブータンはディワンギリから入域し、マナス川を斜断・遡上してチベットに越境した。踏査の終盤にブータンから正規の峠を越さずに、脇道に入った温泉場を経てチベットに入りユラゾン（クーラカンリの南東）に近づいた。

彼らは周辺の警戒を事前に察知し、測量道具を岩陰に隠した。地元民に捕まり、厳しい取調べを受けるが、夜にテントから逃げ出して事なきを得た。これはロシア人や英国人が侵入するといううわさが広まって入国を警戒していたためであった。東に向かってツォナゾンの谷を南下し、東ヒマラヤの高い峠越えを繰り返して、逃亡して 11 日後にタウンに着いた。さらに南下してウダルグリを経て、インドのグワハティに 5 月 31 日に帰り下った。

以上三名の中でナイン・シンとリンジン・ナムギャルがラインを越えてインド領・タウンに入り、ディランゾン以南で通ったルートは、後述するキングドン・ウォードの足跡と同様に、現在のカメン川の右（西）岸を延々とトラバースする車道より随分と西寄りである（ティルマンの 1939 年遠征も同様である）。往古の街道は幾重もの東西系の山脈を南北に縫う九十九折りの険しい峠越えの径であったのだろう。



図 2 マクマホンライン西端のタウン地区の略図

6. アボール遠征

アボール遠征の大義名分はアボール族による英国人虐殺に対し報復し掃討して責任を認めさせ、同族とその他多くの部族に対しインド政府の管轄下にあることを周知徹底することであった。英領インド政府がその威信をかけて北部アッサム全域をカバーした、大規模な測量および広範な分野にわたる一大探検・学術調査事業ということができる。動植物や地質など学術隊も同行した。

この 1911 年末から 1913 年秋まで乾季に行われた「アボール遠征」の作戦範囲はタワンからビルマ北部にかけて、これまで述べてきたマクマホンラインの全区間におよんでいる。英国人とインド人・グルカ人兵士約 1000 名、現地ナガ族数千名を要した掃討と探検の成果はライン画定のうえで地形的、かつ地政学的に決定的な情報をもたらした。もし 1914 年 7 月、第一次世界大戦が勃発していなければ、英領インドの攻勢は中国のもっと奥深くに達し、特に雲南ービルマ国境において国境線は中国側にもっと張り出して決着していたかもしれない。

7. ベイリーとモースヘッドの探検

表 1 にあるようにベイリーとモースヘッドはかの有名なヤルツァンボ峡谷探検のあと、ヤルツァンボを上流に向かって西進し、南下してタワンに抜けた。1913 年 5 月から 11 月まで半年にわたるこの探検によって、ディバン川（プラマプトラ川の北東支流）源頭の脊梁を北に越えたペマコ地区に東西方向の明瞭な谷があること（国境線が自然な流域境界で引けることを意味する）が初めて判明した。さらにスバンシリ川（プラマプトラ川の北西支流）の源流が東ヒマラヤ山脈を分断してチベット側に奥深く入っている国際河川であること（上流のチベット族と下流のロパ族の間に無人域があり、ここに国境ラインを引いた）が発見された。マクマホンラインは一面では東ヒマラヤ山脈の測量をやりとげたモースヘッドのラインと言えるかもしれない。彼はツァンボ峡谷探検の直前までアボール遠征に測量尉官として従軍し、ミシミ丘陵や崗日嘎布曲^{カンリガクブチ}まで歩いており、ライン東部の地形を熟知していた。ベイリーとの探検で西部のラインと地形図をつないだことになる。彼らの功績はともすればツァンボ峡谷探検に目がゆきがちであるが、それだけではこの探検の真価を見あやまってしまう。

彼らは 6 ヶ月におよぶ行程の終わり、一度（ライン成立まえの）国境を越え 1913 年 10 月にタワンに到達したあと、再度チベットに別ルートで引き返し、さらに 2 週間も踏査を続けた。私はこの行動に地形や民情の解明という情報員としての使命感はもちろんであるが、安逸な帰還を求めずあえて冒険とリスクに挑んで奮い立つ隆盛期英国人のジョンブル魂を見る思いがする。その心意気は安定志向や成熟社会などの美名のもとで日本人が失ってしまった精神文化のように思われる。

8. ラインの西部・タワン地区の所属をめぐる攻防とキングドン・ウォードの探検

ライン線引きの折、ブータンに隣接するライン西部で問題となったのは、国際河川のニャムジャンチュとタワンチュが北から南に貫流しチベット文化圏がかなり南まで浸透していたタワンと南のモンユール地区であった。ラサの大寺院デブン寺の支配下にあったタワンゴンパを首都とするタワン地区は、シムラ会議の折、会議を担保する条件としてチベットが英領インド政府に割譲し、シムラ会議でもインド領と認定されていたが、その後もチベットは税金を取り立てて実効支配を続けていた。インド政府は遠隔地であり、長い間表沙汰にする気にも無かったようである。

しかし、一人の探検家の行動がにわかに国境問題を喚起^{めんき}させることになる。それは、キングドン・ウォードが 1935 年 6 月中旬、タワンの東からチベットのスバンシリ川の源流に越えた時である。彼はモンユール

地区の有力なチベット僧を通じて入国の申請をタワンゴンパに出していたが、結果的にチベットが拒否することを予想し、その返答を無視して密入国したのである。密入国は直ぐに政治問題化した。彼はそこチベットの官憲に追尾され、ポ地方のトンギュクで共產主義の密偵の嫌疑で拘束され尋問されることになる。この嫌疑はキングドン・ウォードが取り調べた刑事からある英国人の名前を尋ねられ、すかさず正鵠を射たことで晴れる。それはギャンツェに長く住んでいた彼の旧知のマクドナルド（20 年在留した英国のエージェント）のことであった。

いっぽう、チベット政府はシッキムの政務官であったウィリアムソンに不満の意を伝え、グールド使節団が 1936～37 年ラサにおもむいた折にも同様であった。使節団は数回にわたり、マクマホンラインとタワンの地位についてチベットと議論した。このように、英国は改めてマクマホンラインを確定し、領有する意思（管轄事務所の設置や軍の駐留）を明確に標示せざるをえない状況になったのである。

第二次世界大戦後独立して間もないインドが、1962 年東部地区（タワンからミャンマー北端まで）での中国との国境紛争を負け戦ながら何とかしのぎ、現在もマクマホンライン以南の実効支配を続けている現実をよくよく考えると、キングドン・ウォードの密入国は英国とインドにとって、国益は断固守するという民族意識を喚起させた事変と言える。結果として「災い転じて福となつて」予期せぬ余禄をもたらした探検であったと思われる。現在タワン地区にはディランゾンからセラ峠に通じる自動車の沿線にかなりの数の軍事基地があり、ひんぱんに軍用トラックが往来している。軍用施設や橋は写真撮影禁止で、今でも中国人はアルナチャル・プラデシュ州には入れない準監理地区である。とくに山域は秘密保護法で厳しく管理されているそうである。最近の国境地域におけるインフラ整備に関しては末尾に簡単にまとめた。

以上に述べたように、アボール遠征にしろ、ベイリーやキングドン・ウォードにしろ、ほかの探検家の行動も含めて、探検の目的がどうであれ、その動機や探検中の事件は当時のチベットやインドおよび中国との国際政治情勢と深い係わりを持っており、探検の結果は国際関係に大きな影響を与えたことを読み取ることができる。

9. 1962 年の中印国境紛争

第二次世界大戦後インドと中国は相次いで独立した。両国は新しい外交関係の構築に向けて、ネール首相と周恩来外相の間で数次の外交交渉を行なったが、国境問題に関しては合意に至らず決裂した。その後、1959 年のチベット大動乱をきっかけに緊張が高まり、ダライ・ラマ 14 世はインドへ亡命する。そのルートはニャムジャンチュ沿いに南下しタワンを経由した。その折の写真がタワンゴンパ博物館に掲示してある。緊張が続くなか、1962 年 10 月ついに両国の戦端が開いた。中国軍がアッサムの西端にあるニャムジャンチュの谷沿いと、その東のトゥルンラ峠の 2 方向から軍を侵攻させ、圧倒的に攻勢で戦いを進めた。2 週間後にはインド軍の要衝タワンが陥落した。さらに中国は軍を南進させ、標高 4000m のセラ峠に迫った。ここでは一つの英雄譚が誕生する。峠に通ずる山間の要路の戦闘では、トーチカに籠り中国軍の猛攻を一人で 72 時間も阻止したインド軍の英雄兵士がいたのである。その記念館が建っていた。

記念館から北に眺望が開け、タワンチュの深く切れ込んだ谷筋と対（北）岸の前山の奥になだらかに波打つスカイラインを一望に収めることができる。そこはもうマクマホンラインが走るチベット高原の南縁である。右手（東）に向かって稜線がせり上がり、東端には氷河が懸かる高峰（ソ連の 50 万分の 1 地図の 5766m 峰）からゴリチェン（6488m）に続く雪稜が雲間に輝いていた。いずれも未踏峰である。

この中国軍の侵攻の時期は実に巧妙に仕組まれている。まずパキスタン、ネパールそしてミャンマーと国境条約を締結して、向後の憂いを取り払った直後であること、1954 年にインド・中国の両国間で締結され

た平和五原則（領土主権の相互尊重、相互不可侵など）を前文とする「チベットに関する通商交通協定」が 1962 年 6 月に失効した直後であることなど、中国がメンツを損なわない仕掛けは十分施されていた。

中国の侵攻に対し、インド大統領は非常事態宣言を出して世界に救援を求めた。中国軍の急襲のあと、一時小康状態になったものの、まもなくさらに中国は軍をベイリーが 1913 年に通ったルート（ベイリー・トレイル）に沿って南下させた。ラインから南東に直線で 75km、ブラマプトラ川まで 90km の所に位置するボンジラ（2600m）にある最も重要な要塞は落ち、一部の隊はテズプールに達し中国軍の圧勝に終わった。しかし 11 月下旬中国軍は突如一方的に停戦を宣言して軍を撤退させ、1959 年の実際支配線（マクマホンライン）からそれぞれ 20km 後退することを提案した。補給線が伸びすぎて冬の作戦を避けたという説もある。

このように中国軍が攻めるだけ攻めてさっと引き、優位な立場に立ったうえで、「さあ、どうだ」といわんばかりに当事者間の会議を提案するのは、中国外交の露骨で巧妙な常套手段である。最近では東シナ海の海底油田開発をめぐる日本との摩擦や、最近ことに激しくなった南シナ海諸島でのベトナムやフィリピンとの領有権紛争で同じ手法が認められる。尖閣列島の問題は 2012 年 9 月の日本の国有化以来にわかに顕在化した^{つと}が、このような歴史的な事実からみるとゆきつく先は明らかなような気がする。それだけに国際法に則^{つと}った先占の領有権ははっきりと主張し、国土は自分たちで守るという確固たる覚悟と行動が日本人に求められている。そして私たちには前世代から引き継いだ貴重な国土や社会資産を次の世代に遺す責務がある^とと考える。私は沖縄が祖国に復帰する直前の 1970 年 12 月に、魚釣島ほか 2 島に上陸し 10 日ほどキャンプ生活をしながら地質調査をした。主峰の奈良原岳（362m）に登ったことがありとくにその思いは強い。

タワンには印中戦争記念館がある。犠牲となったインド兵 2420 名以上の兵士銘碑は胸を打つが、なかでも圧巻は中国軍の快進撃を矢印で示した戦闘図が壁一面に掲げられ、稚拙な立体地形模型が置かれた広さ 8 畳ほどの歴戦跡の展示室である。1 名の若い兵士が説明し、1 名は後ろから見張っており緊張感が漂っている。撮影禁止であった。当時日本から緊急援助された小銃が壁に掲げてあった。説明では停戦後の会議でニャムジャンチュの上流の一部は中国に併合され、現在の国境は当初のマクマホンラインより谷ひとつ南に（数 km）後退したとのことであった。説明の兵士は負けた戦いだから仕方がないような口ぶりであった。

ここでは少し説明が必要です。第二次世界大戦直後、中国は内線状態で混乱し、外交の余裕はなく、1949 年の共産党による建国後もしばらく放置したままでした。この間インドのネール首相は印中国境でマクマホンラインを現地で確定するという大義名分のもとに北進政策を進めます。軍は険しい山岳地に分け入ったのです。この時問題になったのが、流域が両国にまたがる国際河川沿いでした。ライン西端のニャムジャンチュ沿いには点々とチベット系のモンパ族が住む集落があります。私たちが訪れたジミタン村（標高 2065m、人口 1200 人）は現在インド領で最北（最上流）の村ですが、その上流約 12km にレ村があり中国領です。今はこのほぼ中間にラインは東西に走っています（グーグルでは北緯 27°45'26"）。マクマホンが引いたライン（北緯 27°44'30"）はブータン国境に向かう支谷の稜線沿いだったのですが、インド軍の調査ではブータン国境に遡上する峡谷沿いに相当したため、その北側の稜線をラインとし進駐したのです。中国はすぐに抗議し、このブータンとの国境線で囲まれた 65km² ほどの三角流域が紛争の発端です。上記のように緯度で 1' ほど（距離にして約 1.8km）違っていますが、測量の精度の違いなのかどうか分かりません。現在は上記の三角流域を中国が取り戻した形になっています。これが先の兵士が説明したラインの後退でしょう。実に些細なことから国境紛争は起きるものです。

中印紛争に話をもどすと、この後インドと中国の間で外交交渉が行われたが決裂し、合意は無いまま中国

は東部ではマクマホンラインを実効支配のおよぼ境界として事実上認めた形になった。その代わり西部の紛争地であったアクサイチン地区を確保し、現在も実効支配している。これは戦略的な価値と資源の存在を考慮すれば「東部を棄てて西部を生かした」中国の外交の勝利（長沢、1964）と言われている。

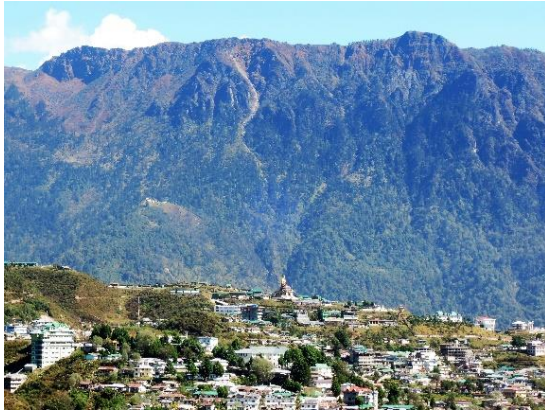
10. 多田等観の入蔵

以上マクマホンラインに関わる前世紀からの経緯と探検家の動きについて簡単に述べました。紙幅の関係で表に示した全ての探検家たちの行動まで筆がおよばなかったことをお詫びします。ただ一つ多田等観について述べておきましょう。彼は河口慧海と違って入蔵の行程についてまとまった記録を残していないので、細かいことは分かりませんが、1913年7月シッキムを発ちブータンを35,6日かけて縦断しラサに入っています。ブータン入国後東に向かい、パロから北に転進しブータンヒマラヤ主稜に聳えるチョモラーリ（7326m）の東の峠（彼は標高6500mと書いていますが、何かの間違いでしょう）を越えてヤムドックツォ（湖）の西にあるナカルツェ（これが手掛かりとなる唯一の地名で、私も確認しました）に出たようです。6500mもの高い峠は見あたらないようですが、英国の検問を非常に警戒していましたから通常のルートではなかったのでしょう。十分な装備も無いなかでよくぞ雨季の山越えをしたと思います。ベイリーがタワンを歩いたのが1913年秋で、ちょうど同じ頃の探検行ですから、ひょっとしてタワン近辺で等観がベイリーとすれ違った可能性はないかと、歴史的な邂逅を期待しましたが、等観はマクマホンラインを越えていないようです。

11. おわりに

今回の旅でタワン地区の道路や宿泊施設のインフラ整備と軍事基地の様子を瞥見しました。土石流を回避する橋梁の付け替えや豪華ホテルの新築など、明らかに積極的に事業が進んでいるのを肌で感じました。軍用トラックが頻繁に往来する交通渋滞や基地の多さに驚きました。これは近年のインド政府の政策転換によるものです。インドは2006年にアルナチャル・プラデシュ州の戦略道路建設を承認しました。この背景は2006年チベットで西寧～ラサ鉄道が開通したことと、2005年カトマンズ～ラサ間のハイウェイが完成したことが大きな脅威となったからだと言われています。さらに、2014年に就任したモディ首相は同州とシッキム州の実効支配線の中国による越境は安全保障上の重点課題として挙げ、大規模なインフラ整備を行うことを表明しました。最近の専門家の分析では、インドが軍事とインフラ両面ですでに中国に迫っているという整備し、攻めの作戦に転換したとも言われています。建設した道路が中国軍の侵攻に利すると言うトラウマ的弱気の判断からようやく抜け出したのです。そして今回私たちがラインから直線でわずか6km南のジミタン村まで入城できたのは、同州を開放しインド化を進める実効支配を既成事実として、世界に平和で安定した実情を喧伝するためでしょう。実際多くの国内外の観光客と会いました。チベットでは外国人が国境地帯へ立ち入ることに厳しい禁制を敷いておりとても考えられないことです。

インド政府は一貫してマクマホンラインを英帝国から引き継いだ国境と主張しています。第二次世界大戦後、インドは中国攻勢の辛酸の時代を過ぎながら、実効支配を堅持してきました。インドはここまでよくやったと思います。日本もインドの国土防衛に学ぶべきでしょう。マクマホンラインをめぐる緊張はチベット情勢次第であることは論を待ちません。中国はチベット支配を確固たるものにするため、向後の憂いであり、後門の狼であるインドとの国境問題は早く取り除きたいはずです。今後ともマクマホンラインの動静は注意深く見守ってゆきたいと思います。この小論は日本ヒマラヤ協会の会誌ヒマラヤ No.470（2014）に掲載された「マクマホンラインと探検史物語」から抜粋し一部を編集し、大幅に加筆・修正したものです。



タウンの町を南から望む。遠方の稜線はチベット高原の南縁で、その北約 15km にマクマホンラインがある。



マクマホンライン西端を南流するニャムジャンチュ。遠方の山稜の北にラインがある。疎林地帯になる。



マクマホンラインの南約 6km にあるジミタンの村。インド領最北の村。遠方の山稜の北にラインがある。



アルナチャル・プラデシュ州入域のチェックポストであるバリバラの北のジャングルを流れるカメン川。

(原稿受付 2016年6月14日)

参考文献(主な書籍を中心に掲げた)

- Bailey, F. M. (1957) No Passport to Tibet, 1913. London, Rupert Hart-Davis. 294p.
- Intelligence Branch, Army Headquarters, India (1913) Frontier and Overseas Expeditions from India: Official Account of the Abor Expeditions 1911/1912, Vol. 7. Reprint, 1984, Delhi, Mittal Publications. 241p.
- Kingdon-Ward, F. (1926) The Riddle of the Tsangpo Gorges. London, Edward Arnold & Co. 317p.
- Kingdon-Ward, F. (1941) Assam Adventure. London, Jonathan Cape. 293p.
- Lamb, A. (1966) The McMahon Line. vol. 1, vol. 2. London, Routledge & Kegan Paul. Toronto, University of Toronto Press. 656p.
- Ludlow, F. (1938) The Sources of the Subansiri and Siyom. Himalayan Journal, vol. 10, p. 1-21.
- Marshall, J. G. (2005) Britain and Tibet 1765-1947. London, Routledge Curzon. 643p.
- Maxwell, N. (1970) India's China War. Bombay. Jaico Publishing House. 475p.
- Tilman, H. W. (1946) When Men and Mountains meet. Cambridge, University Press. 232p.
- Waller, D. (1990) The Pundits British Exploration of Tibet & Central Asia. The University Press of Kentucky. 327p.
- 九州大学・長崎大学合同学術調査隊 (1973) 東支那海の谷間－尖閣列島. 105p. + 写真・資料集
- 長沢和俊 (1964) チベット. 校倉書房, 310p.

